

研究の背景とトランスジェンダーに対する意識

オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究 その1

正会員 ○高橋 未樹子*
同 日野 晶子**岩本 健良***
大出 摩紀*
小池 由紀**オフィス トイレ トランスジェンダー
性自認 LGBT 意識調査

1. 研究の背景と目的

さまざまな調査によると、日本でも数%が LGBT など性的マイノリティだと言われており、オリンピック憲章や国家公務員の人事院規則に基づいて「性的指向や性自認による差別禁止」が進められるなど、性的マイノリティへの差別禁止が社会的にも大きなテーマとなっている。

なかでも、出生時に割り当てられた性別と自認する性別とに違和感（以下、性別違和）をもつトランスジェンダーのなかには、外出時のトイレ利用において、出生時の性別と自認する性別どちらのトイレを利用するか悩んだり、更にはどちらも利用しづらいことから多機能トイレなどの男女共用トイレを利用したりと、ストレスを抱える者も多い¹⁾。特に、顔見知り同士が利用するオフィスのトイレにおいては、性別移行中である、周囲の理解を得られない、自身がトランスジェンダーであることをカミングアウトしないと自認する性別のトイレを利用しづらい、多機能トイレを使うことはカミングアウトに繋がることもあるなど、不特定多数が利用する公共トイレ以上に深刻な課題となっている。実際に、従業員と勤務先との間で裁判になっている事例もある。

そこで本研究では、より課題が深刻なオフィスのトイレにおいて、トランスジェンダーが利用しやすい、また、トランスジェンダーなど性的マイノリティだけでなく誰もが利用しやすいトイレのあり方を見出すことを目的として調査を行っている。本報はその1として、性別違和のないシスジェンダーからみたトランスジェンダーに対する意識について報告する。

2. トランスジェンダーについて

トランスジェンダー概念の定義については異なる系譜と変遷があるが、WHO をはじめとする複数の国際機関・学会の報告書では、「自身を出生時に割り当てられたジェンダーとは異なるものとして認識している人々」と説明されている²⁾。日本でも近年、トランスジェンダーという言葉が耳にすることが増えてきたが、似た意味をもつ言葉として性同一性障害のほうが浸透しているかもしれない。性同一性障害は、WHO が定めた医学的な疾患名で、トランスジェンダーのなかでも、出生時に割り当てられた性別

に持続的に違和感を持ち、身体的性別を自己意識に近づけるために医療を望む状態をいう。

性同一性障害者に関する調査として針間氏らの報告³⁾では、性別違和で受診した症例数は 2015 年までの合計で 2.2 万例と、3 年間で約 7 千例増加している。また、「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」（2004 年 7 月 16 日施行）に基づき戸籍上の性別を変更した件数は図 1 に示す通り年々増えている。これは、性同一性障害者が近年になって増えたのではなく、インターネットなどの普及により自身の性別違和に対する知識・意識の変化、社会の認知の広がりによるものだといわれている。

一方、トランスジェンダーに関する調査として、博報堂 DY グループらの 2016 年の調査⁴⁾では 0.47%が、日本労働組合総連合会の 2016 年の調査⁵⁾では 1.8%がトランスジェンダーとの報告がある。その他、アメリカでの 2018 年の中高生に対する調査では、約 2.7%が性別違和を感じているとの報告もある⁶⁾。

このように調査方法により違いはあるが、医学的な治療や戸籍変更は必要としない者も含めると、性別違和を感じるトランスジェンダーは数%存在すると考えられる。

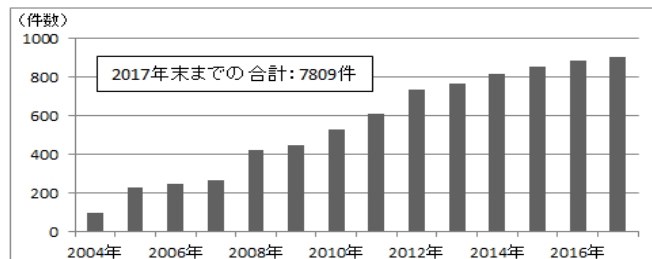


図 1. 戸籍上の性別変更件数の推移

3. 調査方法

調査は、インターネットアンケートモニターに登録されたオフィスで働く 18～59 歳を対象に、2017 年 11 月に行った。2016 年の住民基本台帳に基づいた年齢別人口分布でアンケートを配信し、30,000 人から回答を得た。性別違和の有無を確認するため、出生時に割り当てられた性別と、自認する性別を質問し、表 1 の通りシスジェンダーとトランスジェンダーの判別を行った。その結果、表 2 に示す通り性別違和を感じるトランスジェンダーは全体の 2.0%であった。

表 1. 性別違和に関する質問から判別したジェンダー

出生時戸籍性別	性自認	ジェンダー
男性	男性	シスジェンダー
	どちらかといえば男性	判別不可※
	どちらかといえば女性	トランスジェンダー
	女性	
	X・中性・無性など	
	わからない・その他	
女性	答えたくない	判別不可※
	男性	トランスジェンダー
	どちらかといえば男性	判別不可※
	どちらかといえば女性	シスジェンダー
	女性	トランスジェンダー
	X・中性・無性など	
	わからない・その他	判別不可※
	答えたくない	判別不可※

※性別違和の判断が困難なため、調査対象外とした。

表 2. 回答者状況

ジェンダー	回答者数	割合
シスジェンダー	28,066 人	93.6%
トランスジェンダー	600 人	2.0%
判別不可	1,334 人	4.4%
合計	30,000 人	100.0%

4. シスジェンダーからみたトランスジェンダーに対する意識

表 2 のシスジェンダーのうち現在日本で就労していない者を除いた 27,819 人に対し、自身のオフィスにトランスジェンダーがいること、オフィスのトイレをトランスジェンダーが自認に沿った性別で利用することに対する意識について調査を行った。その結果を図 2、3 に示す。

オフィスにトランスジェンダーがいることに対する意識では、抵抗はないと答える者が 76.9% という結果だった。なかでも女性は男性より 14.5 ポイント高い。年代でみると、年齢が上がるほど嫌だと答える者が多かった。

次に、トランスジェンダーの自認に沿ったトイレ利用については全体では 65.5% が抵抗はないと答え、周りにトランスジェンダーがいることに比べて抵抗を感じる者が増えた。その傾向は特に女性に顕著で、抵抗はないと回答した者が、周りにいることについては 84.2% だったのに対し、トイレ利用については 64.2% と 20 ポイントもダウンした。3.0 ポイントダウンとほぼ横ばいだった男性に比べ、トイレ利用に関しては抵抗を感じる女性が多かった。抵抗を感じている女性のなかでも、「見た目が女性ならよい」という意見がある一方、「なんとなく、よく知らないの」という知識の無さに起因すると思われる回答も多く、また、「変質者が入ってくるのではないか」という防犯面からの不安の声もあった。トランスジェンダーも含めて誰もが利用しやすいトイレ環境の実現には、トイレの防犯性を高めることも必要だが、性的マイノリティについて適切な知識を得ることも重要と考えられる。

□ 抵抗はない ※ どちらかといえば抵抗はない ■ どちらかといえば抵抗がある ■ 抵抗がある

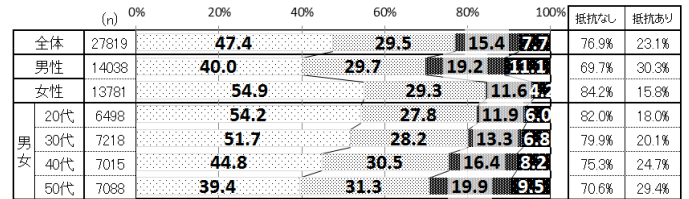


図 2. オフィスにトランスジェンダーがいることに対する意識

□ 抵抗はない ※ どちらかといえば抵抗はない ■ どちらかといえば抵抗がある ■ 抵抗がある

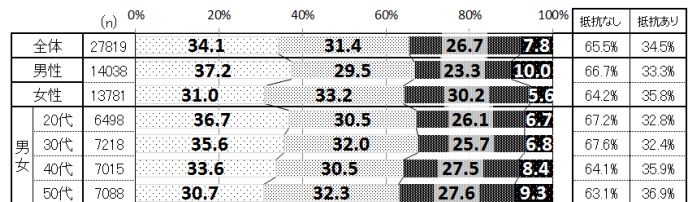


図 3. トランスジェンダーが自認の性別トイレを利用することに対する意識

5. まとめ

調査の結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 3 万人に対する調査の結果、性別違和を感じるトランスジェンダーは 2.0% の 600 人であった。
- 2) 自身のオフィスにトランスジェンダーがいることに対する理解は男性より女性の方が、また年齢が若いほど高い。
- 3) トランスジェンダーの性自認に沿ったトイレ利用については、男性に比べて女性の理解が低い。トイレの防犯整備とは別に、性的マイノリティについての教育も重要であると考えられる。

次報では、現在利用しているオフィストイレの満足度とその影響要因について報告する。なお、本報告は「オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究会」（金沢大学、コマニー(株)、(株)LIXIL）で行った調査を取りまとめたものである。

6. 謝辞

最後に、本研究の調査にご協力を頂きました(株)アピスの林徹様に深く感謝を申し上げます。

参考文献

- 1) (株)LIXIL、NPO 法人虹色ダイバーシティ、2016 年、「性的マイノリティのトイレ問題に関する WEB 調査結果」
- 2) 東優子、こころの科学 No. 189、2016 年、「トランスジェンダー概念と脱病理化をめぐる動向」
- 3) 針間克己、GID 学会第 19 回研究大会、2017 年、「「性同一性障害に関する委員会」による性別違和が主訴の症例数と国内外性別適合手術例数の推定調査」
- 4) (株)博報堂 DY ホールディングス、(株)LGBT 総合研究所、2016 年、「LGBT をはじめとするセクシャルマイノリティの意識調査」
- 5) 日本労働組合総連合会、2016 年、「LGBT に関するオフィスの意識調査」
- 6) CNN.co.jp、2018 年、「男子でも女子でもない」中高生、米国で増加、<https://www.cnn.co.jp/usa/35114362.html>

*コマニー株式会社

**株式会社 LIXIL

***金沢大学 人文学類 准教授 文修

* COMANY INC.

** LIXIL Corporation

*** Assoc.Prof. School of Humanities, Kanazawa University, M.A